

ホトトギス

昭和二十五年三月二十八日運輸省特別取扱承認証第六二七号
平成二十三年十月一日発行 第四百十四卷 第十号

ホトトギス

十月号



俳句随想 〔三百五十二〕

汀子

最近、季重りについての質問を受けることが度々ある。その度に私は次のようにお答えする。「出来れば初心者是一句に一つの季題を使った方がいいかも知れません。でも一つの季題を強調するために、或いは修飾するために他の季題を使つても一向に構わないのです。それは一つの季題を助けるために使うことになるからです」

有名な季重りの俳句がある。「目には青葉山ほととぎすはつ鯉 山口素堂」この季題は何であるか。「目には青葉の美しい季節になった。山では頻りにほととぎすが鳴きはじめた。さあ、初鯉の美しい季節になりましたよ」とこのように解釈してこの季題は初鯉なのである。季重りが良くないと言う指導者は初心者に対してのみ散漫な俳句にならないように指導されるのである。短い詩である俳句は主の季題が働いて名句になる。一句が割れたりばらばらになって意味が散漫になってはならない。それを憂い季重りを避けようとする指導者もいるのだと思う。

今、私は「月」という句集を編むために、句帳の整理をしている。季重りも結構ある。しかし「月」を主題にする句を集めている。

旬日記 汀子

平成二十二年十月二十日 芦屋ホトギス会

鳴鳴いて結界のなき庭なりし
芒活けほほけるほはなかりけり

十月三日 下南旬会

甘く見てあらぬ山路の霧となる
忽ちといふは山路の霧のこと

滞在の新米送りありしこと

山霧に囚はれの身となりけり
十月四日 ロイヤル俳壇吟行会

霧込めて琵琶湖しづもりをりにけり

霧動きそめ湖明け行きにけり
十月七日 清交社

人の背の高さの通草なかりけり
きざはしを上り切つたる秋の風

六甲の全貌とらへ鳥渡る
爽やかに俯瞰三百六十度

秋冷の松ふ水音なりしかな
正面の松の手入のはじまりぬ

十月八日 工業倶楽部

色鳥のとび立つ色を残さず
今日まである庄の句碑の辺に

色鳥の来てある庄の句碑の辺に
担当の交代告ぐるそぞろ寒

又星を見にきざはしのそぞろ寒
十月九日 ホトギス社吟行会

武蔵野の路地を迷ひぬそぞろ寒

駅前と聞きて迷ひぬ秋の雨
これよりの桜紅葉を描く園

出逢ひあり別れあり身に入む一日
露寒の雨の一日いとはずに

十月十日 大阪倶楽部

横川路の野菊に心置きて発つ

九十九折とは野菊見て湖を見て
整然として鳥渡る秋かな
朝の間の一人の時間秋深し
スケジュール割込んで来し野菊晴
雨止んで露寒を身に纏ひたる
十月十一日 綿業倶楽部

さつきまでや、寒きことかこちをり
や、寒と思ひたるよりくつろがず
朝の間のや、寒失せてをりにけり
とどのはぬ季節といへど稲の秋

十月十四日 西の虚子忌

横川路の紅葉を誘ふ山日和
半世紀横川の露を踏み分けて

紅葉とも薄紅葉とも着きにけり
十月十六日 九州ホトギス同人会

鯛雲とて快晴の一部分
秋晴といふ旅心には回顧

十月十七日 九州ホトギス同人会
しみみとふり返りつつ灯下親し
秋灯を消し一と眠り二た眠り

思ひ出を繕けば秋深きこと
一泊の旅とは秋の深かりし
十月十七日 九州ホトギス俳句大会

そよぐものより秋風の中にあり
旅心華やきつつもそぞろ寒
十月二十日 夏潮旬会

豊作といふ松茸を献立に
育てたき芝末枯れて行くばかり
露つけしや仕事一割崩しても

十月二十二日 クラブ合同
霧抜けて又霧抜けて又霧一歩
命綱脱ぎて終りぬ松手入

十三夜うすうす所在ありしこと

十月二十日 時雨会

秋の雨降りつものり来し夕べかな
やや寒を心地良しとも思へる日
稿債の半ば携へ旅の秋

十月二十三日 句会と講演の会
庭芝は養生中よ小鳥来る
快晴の秋へ編集会議終へ

爽やかにありて処さねばならぬこと
刻々の予定こなしてゆけ秋思
十月二十六日 年尾忌

露けしと思へばそれもなつかしく
年尾忌に親しむ心集ひけり
鈴成の榎櫃に忌日みそなはせ

十月二十八日 きんぎょ会

目の前を過ぎゆく月日身に入みぬ
萩刈りし跡にひそめし命あり
定まらぬ陽気身に入む一日かな

大空を閉ざす雨雲身に入みて
やがて焚くつもり萩を刈り置きぬ
つる雨つもの身に入む心かな

十月三十日 中国ホトギス同人会

十年の前の旅路も秋なりし
すれ違ふ台風進路交はらず
露けしや松陰のこと萩のこと

静けさにあれば露けき心添ふ
咲き残る萩と気づきて近づきぬ
秋惜む心に訪う萩の町

十月三十一日 中国ホトギス俳句大会

紀陽さん惚べば萩の灯下親し
秋惜む心に惚ぶ人ありて
露けしと思へばいさぎよくとも

世の中を變へて露けく生くとも
主義主張貫く若さ身に入みぬ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十月三日 野分會舎屋例会

遷都千三百年といふ秋思
とある日のとある佳人の秋思かな
もう止めませうと妻言ふ秋思かな

十月四日 はせを句会

秋声に東京タワー倒れさう

十月四日 カトリック新聞選者吟

曼珠沙華天与の風に色付きし

十月七日 蕉心会

屋の虫おのれも猫が恋しいか

水澄みて風に温度を預けゆく

うそ寒き角度に水尾の消えゆけり

天帝の氣紛れば秋風にまで

萩咲いてカレーの匂ふ喫茶店

薄紅葉館の要として楚々と

水音に薄々紅葉揺れ初むる

みちのくの芸術的な茸かな

十月九日 ホトトギス社吟行会

一雨に秋声深く黙しをり

パステルに多摩を染め上げ秋微雨

十月十三日 土筆会滋賀吟行

露の門潜りて親し幻住庵

幻住庵露ちて近江といふ出会ひ

芭蕉の世露けく語る庵かな

俳聖を語り継ぐかに屋の虫

十月十四日 西の虚子忌

鱗雲忌日の空を引き絞り

山門に入るやや寒き足取りに

大道を継ぐ君の居て西虚子忌

十月十六、十七日 九州ホトトギス同人会、大会

行めば句碑の裏より秋の風

除幕せし日を語る目の爽やかに

都府楼址てふやや寒き昔かな

そぞろ寒故人の名前聞くにつけ

秋灯を明るうせよと虚子の声

灯下親し佳人に注がれたる地酒

明日よりはホトトギス社も冬支度

十月十八日 朝日カルチャー若草句会

爽やかに江戸と筑紫を継ぐ鉄路

星飛んで地球を少し平らにす

初紅葉 古の朱 醸す 寺

爽やかにホークス応援する佳人

十月十九日 草木句会

肌寒や阪神ファンといふ運命

実むらさき日本の色でありにけり

肌寒き聖堂ミサの鐘響く

肌寒き聖堂ミサの鐘響く

式部の実零れて光失へり

十月二十一日 登高会

初紅葉横川に大いなる忌日

路地の風べつたら市の香を運ぶ

初紅葉新幹線は西に伸び

皇居より風を貰うて初紅葉

故郷に横川筑紫に初紅葉

十月二十三日 ホトトギス社句会

小鳥来る昔犬小屋ありし花圃

恋といふ一病と付き合ふ秋思

小鳥来る一羽道草してをりぬ

十月二十四日 野分會東京例会

砂浜に秋思の歩幅ありにけり

秋思の目宇宙の果てを見てをりぬ

稜線を啄木鳥丸く仕上げゆく

富士演習場啄木鳥か銃声か

十月二十五日 若水句会

去来忌や小さき小さきと墓詠まれ

浮塵子跳ぶ跳ぶ嫌はれてゐても跳ぶ

去来忌を身近にしたる一句かな

日本の色と甘さや吊し柿

人の世に生れて浮塵子といふ哀れ

十月二十六日 年尾忌

松手入忌日の寺の装ひに

添水鳴る忌日の空を仕上げつつ

阪神の優勝祈願年尾の忌

十月二十七日 目黒学園句会

秋惜む忌日の空でありにけり

叡山に忌心深め茸飯

毒茸のやうな一言放つ君

うそ寒を連れる忌を二つ終へ

秋惜む大いなる忌を二つ終へ

十月二十八日 「円虹」出句「ジバンク」

明日といふ未来引き寄せ日脚伸ぶ

待春の茅渟海より明けて来し

六甲を背に風花は未来へと

三寒に祈り四温に踏み出せり

春隣 俳句の未来 故郷に

十月二十九日 ひまわり俳壇選者吟

室の花明日を約してをりにけり

十月三十、三十一日 中国ホトトギス同人会、大会

秋惜みつつ開国家の世を偲び

うそ寒く松陰生家礎石のみ

台風とすれ違ひたる西の旅

冷やかな距離を保ちて墓並ぶ

結界としての山門やや寒し

葛紅葉墓所彩つてをりにけり

乾杯を終へて忽ち河豚の宿

雑詠

廣太郎 選

明易や四時随順の百余年 神戸千原叡子
 醬も亦龍野の誇風薫る 同
 除幕の日語る住職句碑涼し 同
 草引いて今日お別れにならうとは たつの三木その女
 青葉木菟別れの夜も庭に来て 同
 草若葉お別れはまだしたくなく 同
 神の手をこぼれて滝の落つるなり 熊本岩岡中正
 音たてて立夏の水となりにけり 同
 桐の花晩年さして遠からず 同
 快晴に始まつてゐる子らの夏 芦屋黒川悦子
 ラベンダー空まで続く丘に立つ 同
 一束のラベンダーの香と帰路につく 同
 虚子偲ぶ同窓会や明易し 京都安原葉
 年一度語る消息明易し 同
 この会にもらひし元氣明易き 同
 万緑発万緑行や山のバス 奈良古賀しづれ
 一山の梅雨霧一村を閉す 同
 山国の木霊の宿る句碑涼し 同

光るまで待つて飛ぶまで待つて 香川湯川 雅
 水馬水に囲まれぬる自由 同
 旅先の下闇に潰されにゆく 同
 たかんなの掘り頃といふ見えぬもの 東京河野美奇
 たかんなの一夜の丈に雨雫 同
 竹の子の育つ雀のお宿かな 同
 待つ日々のたちまち残る花の日々 龍ヶ崎今橋眞理子
 行春や任地へと子を見送りて 同
 春宵の灯色へ移る丸の内 同
 文塚の闇を抜け来し夏の蝶 神戸山田佳乃
 蚕豆の荷の緒のほのと湿りたる 同
 露の葉は太古のままに山の雨 同
 梅雨曇大河の光奪ひけり 八尾山下美典
 黒南風に落着きのなき風見鶏 同
 波音も無く夏潮の浜に寄す 同
 大空へ色の音階立葵 東京橋本くに彦
 空こぼしまだ整はぬ木下闇 同
 權の音つぎづぎ乗せて夏の川 同
 一族の盛衰ここな夏潮に 同
 代々の萱葺屋根に蜘蛛と住む 今井千鶴子
 目も鼻もなくて蚯蚓の真暗がり 同
 噴水のアールドゴより立ち上る 宝塚水田むつみ
 噴水の律義に刻を繰り返す 同
 行跡のなき身軽さも水馬 同

雑詠句評（九月号より）

むつみ・眞理子・保佳
憲明・千鶴子・美奇
静龍・中正・葉
とほ歩・廣太郎

うつくしきもの咲き満ちて百千鳥 たつの 浅井青陽子

浅井青陽子様は残念ながら五月十三日にご逝去、ご冥福を祈ると共にその業績とご長寿を称えるばかりである。百一歳でなお相談役としてご活躍、経済界は勿論たつの市の文化発展に貢献され、たつのになくはならないお方だけに惜しまれる。

この句には、たつのの美しさを賛美し、自然をこよなく愛した作者の為人が滲み出ている。小京都とも言われ山紫水明の美しい町を心から守って来られた。玲瓏たる鶏籠山からの鳥語を楽しむ、聚遠亭の四季を詠む姿はまさしく咲き満ちた「うつくしきもの」に囲まれた俳人そのものである。楽園の百花と百千鳥に包ま

れ幸せな日々を送る作者を彷彿とさせる一句である。（むつみ）
ひよつとすると、この御投句が作者自身最後のホトトギスへの御投句になるかも知れない。御存知の通り、平成二十三年五月二十三日、満百一歳の生涯現役としての人生を終えられた。仕事を愛し、何よりも俳句を愛した人の、この上もない自然讃歌として、永遠に残る作品である。（廣太郎）

魔法派と科学派のゐて蜃気楼 神戸 藤井啓子

「海底の蜃が気を吐いて空中に樓閣を現す」これは、魔法派の考え方だろうか。かたわらで、科学派が光の屈折について説いているのかも知れない。蜃気楼の前にさまざまな談義が交わされているのであろう。そのどちらにも耳を傾けて蜃気楼をながめている作者。対比が蜃気楼の謎を語っている。（眞理子）

砂漠等でよく見られる「蜃気楼」は、日本では四月に・富山県魚津市でよく見られるそうであるが、筆者は未だ実際には見た事がない。一見不思議な現象ではあるが、科学的にはほぼ解明されているとも聞く。しかしロマンチックな側面の方が、季題として相応しいだろう。そんな微妙な魅力のある句。（廣太郎）
（以下略）

天地有情

花子選

惜春の瓦礫の中に探す物
 身一つの災禍に八十八夜かな
 日に解けてゆく朝桜あさざくら
 桜にはやつぱり青空が似合ふ
 俯きて咲く黄桜を人仰ぐ
 風船も逃げて疲れし家路かな
 山眠るてふ哲学に入りにつけり
 山笑ふより下りて来て溪唱ふ
 父の日やもう父のなき娘たち
 木洩日に涼しからむと遙かより
 初花の一つの何と誇らしく
 天心に日の移りても花の冷
 まづひかる高木の梢や朝桜
 何事ぞ象の真紅の落椿
 吟行の摘みたきときは草をつむ
 水辺ゆくとき惜春の人となる
 梅雨の山なきがごとくにありにけり
 螢火のいのちの川となりにつけり

仙台 赤川誓城
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 京都 安原 葉
 同
 大阪 蔦 三郎
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 相模原 木村享史
 同
 樞原 稲岡 長
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 明石 中杉隆世
 同

住吉の歌神宿る木下闇
 蛇の衣住吉さんの松に脱ぐ
 瑞枝より光こぼれて風五月
 峡深き雨の烟らす花棟
 森の抱く梅雨じめりてふ大地の香
 かきつばた雨意は空より地にひそむ
 堂々とよぎる片羽蟻のもの
 欲張りて獲物入らぬ蟻の穴
 余花ふぶき止まざる溪の深きこと
 雨の余花濡るるを忘れ仰ぎをり
 切株を立つ吾に蝶も立ちにつけり
 柳絮払ひつつの読書や芝にぬて
 渋滞をさけて天城路山桜
 渋滞のとけ下田着鯉幟
 能面を一步出でたる壬生の面
 これがその空飛ぶ鶴の壬生の面
 木木の葉音重奏となる梅雨の森
 梅雨寒し森の奥へと渡る鐘

奈良 古賀しぐれ
 同
 箕面 井上浩一郎
 同
 神戸 長山あや
 同
 東京 橋本くに彦
 同
 同 河野美奇
 同
 熱海 嶋田摩耶子
 同
 同 嶋田一步
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 吹田 宮崎 正
 同

天地有情句評

汀子

春の息吹の山と溪。

父の日やもう父のなき娘たち 東京 今井千鶴子

父の日の娘たちへの作者の感慨。

惜春の瓦礫の中に探す物 仙台 赤川誓城

初花の一つの何と誇らしく 相模原 木村享史

東日本大震災に於ける悲しみの一齣。

先ず綻びた桜の一文。

日に解けてゆく朝桜あざざくら 東京 稲畑廣太郎

まづひかる高木の梢や朝桜 樺原 稲岡 長

新鮮な朝の桜から始まる一日。

太陽の一閃を受け止めた朝の桜大樹。

俯きて咲く黄桜を人仰ぐ 京都 安原 葉

吟行の摘みたきときは草をつむ 熊本 岩岡中正

黄桜への人々の関心の情。

心の赴くままにあるのが吟行。

山笑ふより下りて来て溪唱ふ 大阪 蔦 三郎

(以下略)